



❁ モノクロームの“たからもの” ❁

令和6年2月末、私もこうありたいと尊敬し、人生の目標としていた義父が永眠した。土木技術者として洪水と豪雪から地域を守るため、そして地域の発展のために40年におよびその使命を全うした一方で、山歩きと写真撮影をライフワークとしながら85歳まで山のガイドを務め、たくさんの“たからもの”を私にくださった。葬儀の日にこちらの寄稿依頼を頂き、これも何かのご縁と考え、義父のことを書き記したい。

義父は書くこと、写真を撮るなど記録に残すことがとても好きな方であった。好きというよりそれが生きがいで、記録していろいろなものを見せてくださり、教えてくれた。戦後の経済成長の中での出来事、洪水で大氾濫した時や豪雪の写真、馬を飼っていたとか昔のスキーの写真、木造校舎の小学校、山歩きの写真、etc…。

あるとき「今、戦後土木史の記録を整理している」と途中段階のものを見せていただいたことがある。昭和20年の終戦からはじまり技術者として使命を全うした平成初期まで、古いモノクロ写真を添え記憶をたどりながら整理したものであった。その後、令和2年6月に長い年月を経てようやく完成し、自費にて出版、お世話になった方々へお配りしていた。もちろんこの冊子は私の大事な“たからもの”である。自分はこんな風に記録を残せる生き方をできるのか…。目標にはまだまだ追いつかない。

書き物を残す一方で、自身の記憶を子供たちはじめ少しでも多くの方に語り継ぐため、自前のプロジェクター



左：平ヶ岳山行の中で沢を遡ったとされる遡行
右：藪漕ぎを経て「ひょっこりきれいな空地」*の頂上で野営、九山山房と名入れのテントと後方に燧ヶ岳、いずれも義父が撮影したもの
※深田久弥「日本百名山」26.平ヶ岳より

を持ち歩き、戦後の町の復興や豪雪との戦い、時には山歩きについて語る“出前講座”を余生の取り組みとして続けていた。私の両親との顔合わせのときにもプロジェクターが登場しプレゼンテーションが始まったときには、一同たまげていたことが懐かしい。

ところで、山歩きが好きな方であれば「日本百名山」（深田久弥著）はご存じの方が多いかと思う。26番目「平ヶ岳」の中で義父は「S君」として山行の案内役をしている。昭和37年当時は登山道の無い中、ダム湖を船で渡り、沢を遡り、道無き中を藪漕ぎした記録が記されている。3日間かけて野営しながら山頂にたどり着いた記録など、義父の山仲間の間では周知のことであろう。このお話を聞いたときから平ヶ岳にはぜひ登ってみたいと思いつつも、往復12時間のコースタイムを見て尻込みし、未挑戦のままである。果たして85歳になるまで山歩きはできるのか…衰えていく体力と日々葛藤中である。

目標にはなかなか追いつかないし真似できないことばかりではあるが、未熟ながらも山の相棒とともに生前に頂いたたくさんの記憶を大切に受け継いだ。定年まであと何年？とお互い指折りし、増えていく診察券とともに暮らしてはいるが、モノクロームの“たからもの”を大事にしながらか、せめて義父が歩き続けた平ヶ岳には挑戦したい。

なお、義父が永年暮らした家の裏山には半世紀以上の時を経て苔むした砂防堰堤がどっしりと構え、流れは家の真横の三面張流路工によってどんな時も溢れることなく、長きにわたり家族の暮らしを守ってきた。砂防の工事中は新築の家が揺れ洗濯物に泥と油が飛んできたとかの笑い話も思い出しながら、残された家族をこれからもずっと守ってくれることを願う。

（岡嶋 康子・国土交通省 北陸地方整備局
神通川水系砂防事務所 調査課長）

（参考）平ヶ岳：標高2,140m、群馬県・新潟県に跨がる。現在は山頂付近での野営等禁止。その名の通り山頂付近が広く平らな草原で天空の楽園